

二人の少年と私

平野 真央

私は、日本で生まれ育った。ごく普通に学校に通って勉強して、それなりに友達と遊んで、家に帰ったら温かいご飯を食べる。素晴らしく贅沢な生活があったわけではないが、言わば当たり前の日常を送っていた。そんな生活に変化が訪れたのは、中学二年生の終わり。父の仕事の関係で海外に住むことになり、南米パラグアイに二年間住むことになったのだ。初めての海外生活は私にとってインパクトが大きく、通っていたインター校で日本との価値観や常識の違いを知った。そして、今年の三月に次の赴任地のエジプトにやって来た。食べ物も言葉も全く違うこの国で、ジェスチャーでコミュニケーションを取りながら何とかやってきている。私の学校も始まり、現在エジプトのインター校に通っている。

そんな私の住むマンションには私と同じ学校に通う兄弟がいる。お兄さんの方は私より二つ年下で、弟くんの方は小学四年生、二人とも金髪の青い目をした少年だ。いつもスクールバスを一緒なので、バスを待つ間おしゃべりしたり、一緒に猫を見ていたりそれなりに楽しい時間を過ごしている。ある日、彼らが時より自分たちの母国語で話しているのを見て、二人の出身を聞いてみると、なんとウクライナ人だった。彼らの明るさには一切そんな素振りが見えず、私は驚いた。しかし一度だけ、バスの中ではっとした場面があった。それは、バスの中で弟くんと友達が夏休みの話をしていた時のこと。みんなが自分の国に帰る話で盛り上がる中、何も話さない弟くんを不思議に思いふと彼を見てみると、彼はぐっと言葉に詰まっていた。言葉に詰まる弟と聞こえないふりをする兄。そうか、彼らには帰れる国が今ないのだと、うかつにも後で理解した時、私は胸が締め付けられた。平気なのではなく、ただ「見えていない」だけ。ここで初めて私は、自分には帰れる国があること、そして今まで「平和」の中で生きてきたことを知った。

では私には、「平和」な世界実現のために何ができるだろうか。そう考えた時に思いついたのが言葉で現状を伝えることだった。私には、寄付するお金も世間に大きなインパクトを与える力もない。でも私のこの「言葉」で、少しでも多くの人に世界の現状を知ってもらえたら、いつかそれが大きな力となってくっと「平和」な世界を作る懸け橋となるだろう。そうして近い未来、この二人の兄弟が当たり前のように自分の国に帰れる日が来ることを切実に願う。